

備を進めて行く必要があると考
ます。一方で、我孫子市の財政は、生
産年齢人口の減少などによる、高
の減少が見込まれる一方、高齢
化の加速に伴う社会保障や安全・
安心を支える社会整備への支
出増が見込まれ、予想されます。
状況は、東日本震災による甚大
な被害は、我孫子市の被災し
財政や水道、その他公共施設
道路や復旧には相当の時間と
費用を要する見込みとなつて
です。大震災の復旧・復興は最
先取り組んでいかなければ不
せん。併せて、行政の効率化を
革断行して、行政の効率化を
会から推し進めていく覚悟で
政権交代が求めている日本の再
なく、地域によって成り得る
の連帯を経営の自立、実現し
も、説明責任を伴う市民の意
味として、私は責任を伴う議
と、頼りになる新しい市民の
極的に構築していききたいと思
います。そして、「住んで良かった
て「住んでみたい」と言われる
づくりを目標として、街づくり
兵となるように、また、我孫子
議会で、無くてはならない存在
なるように精一杯努めていき
と思つて指導、ご鞭撻をよろ
続きのお願い申し上げます。



《我孫子の将来を問ふ市長選、
かつ市議かつの狂言》

今年、一月二十三日に行われ
我孫子市長選挙で、二期目の再選
を目指す星野市長の対馬として
私が会長を務める会派「あびこ二
十一」に属する坂巻宗男さんが立
候補し、一騎打ちの選挙となりま
した。私は、これまで同志であつ
た坂巻さんを、微力ながらも精一
杯応援しました。選挙は、市の土
地利用方針を変更して企業誘致を
図るのか、利用方針を維持して「我
孫子の将来を問ふ」とい
いわけば、我孫子の将来ビジョンを
点の展開されました。土地利用方
針の維持を掲げた坂巻さんは、落選
と劣勢が伝えられる中、五千票差を
切るまで、接戦となりました。
選挙でありながら、投票率は四五
六%と前回が僅かに上回る程度で
過半の市民が棄権をされた選挙と
なり、情報は身近であるのに対し、
日々の生活をしていて、自治体の情
人は少ないことを実感しました。情
必要の市議として、更なる情報発
なりまし、痛感し、猛省した選挙と

《未曾有の困難と
未来への責任》

市は、長選挙の直後とも言える三
日には、千選の一度ともいわれる東
日本大震災が被害を及ぼし、地方
中心に甚大な被害を及ぼし、現
が、孫子市でも大規模な液状化象
が、発生し、道路や水道など公共
設に超え、大きな地震被害は、大津波

そして福島第一原発の事故による
放射能汚染の広がり、風評被害な
ど複発的な災害となり、風評被害
未だ不況から脱出できず、国難
に起す。我孫子市も、放射能汚
二キロも離れた地区に、放射能汚
量の測定値が、呼ばれ、放射能汚
トスポントによる被害を受け、直
この複合的な被害を受け、放射能
ます。見えない被害を受け、放射
怖、とりわけ子供たちへの影響を
毎日、市民は大きな不安を抱
復興という責任に加えて、放射能
題と子供を介した将来の不安へ
の対応という未来への責任の重さ
を強く感じています。

印南 宏 現在の主な役職

- 市議会 環境生活常任委員・「あびこ21」会派代表
議会運営委員会オブザーバー
土地開発公社評議員
議会基本条例検討会委員
議会だより充実検討会副会長
柏市・我孫子市議員協議会世話役
我孫子市成田線を便利にする議員の会副会長
- 我孫子市 我孫子市サッカー協会顧問
我孫子市ソフトボール連盟顧問
- その他 連合千葉議員団幹事長
電機連合議員団会議 南関東ブロック幹事
新聞奨学生OB会相談役(前会長)

我孫子の課題と
印南 宏の考え

《九月議会を踏まえ
六月議会を振り返る》

六月定例市議会では、震災復旧
工事に伴う公共下水道事業特別
計補正予算(五億九千四百五十万
円)・旧寿市民センターの我孫子市
商工会への無償譲渡、湖北中など
四校の校舎耐震補強等、大規模改
工事契約締結、消防の高規格救急
自動車や救助工作車の購入、基本
構想の一部改正等十二議案が審議
されました。
このうち、「我孫子市基本構想
(我孫子の将来の基本的方向を定
めたもの)の一部改正」は、継続
審議となることとなりました。
なお、私が属する会派「あびこ
二十」では、(一)震災後の我孫
子市の対応と、(二)子供たちを守
るための放射能対策について、質
と提言を行いました。(一)震災後
の我孫子市の対応では、市内被災
地の復旧・復興対策には、市内外
被災地や被災者支援も指し、外
庭や園庭の土入れ替えや、外
庭・内部被爆の問題も指摘しまし
た。

《高齢化率の高い我孫子市》

我孫子市の高齢者人口(六十五
歳以上)は増加傾向にあり、平成
二十二年四月一日には、六十二
四%を超えています。東葛六市と
比較しても一番高く、柏市十九
三%、松戸市十九%、流山市
二十%、鎌ヶ谷市二十%、野
田市二十一%、三%の順となつて
います。千葉県全体では、二一%
です。

日の出雑感

我孫子市の東西両地区の人口増減差が著しくなり、小中学校での必要な対策を検討する我孫子市小中学校適正配置検討委員会が平成十二年七月に立ち上がった。国の中央教育審議会は三十五人学級編成を答申し、文部科学省も数年以内の実現に向けて動き出した。すでに小学校一学年で三十五人を標準とする学級編成が実施されている。増加が著しい西側地区に位置する根戸小は平成二十六年にピークを迎え、児童数千四百三十六名、四十八学級の見込みとなっている。平成二十五年から教室数の不足も予想される。大規模校になることで、生徒指導や学校行事等に支障をきたすことも考えられる。対策として、①新校の建設

②旧日立精機跡地マンション群児童の学校選択制の実施が考えられている。◆東側地区の布佐南小は児童数の減少傾向が続き、このままだと平成二十六年の入学見込み児童数は一桁、平成二十七年からは全学年が一学級だけの編成となる。故郷での話だが、私の小学校時代は一学級四十七人、一学年六学級だったことを考えると児童数の減少は際立っている。単学級ではクラス替えが出来ないので、児童の人間関係が固定化し、多様な発言を引き出し難いなど、学習上の課題も想定される。対策の一つは「南新木地区の学区の見直し」により、新木小から布佐南

小に学区を変更することである。二つ目は「小規模特認校制度の導入」である。小人数教育の良さを希望する保護者がいる場合、一定の条件を付し、通学区域外からの就学を認めるものである。いづれにしても人口が西高東低になっていく我孫子市では、バランスのよい施策の実施が求められている。いづれにしても未来を担う我孫子の子どもの達の教育環境をしつかりと整備し、将来、禍根を残さないように対策を講じなければならぬ。◆震災後、「この先、日本はどうなっていくのだろう」と漠然とした不安感を抱いている人が多いと推察する。かく言う私も自身も最近まで『疑似被災』ともいえる心理状態になっていったように思う。『疑似被災』とは、震災の惨状を日々報道で見ることで、不安感や無力感に襲われたり、緊張状態が継続したり、あるいは無気力になるなど、まるで自分が被災したかのような心理状態になることを指す。思い当たる人は居ないだろうか。「被災地の方々の苦勞を考えると自分は楽をしてはいけない」と思い過ぎず、もっと自分を大切にすることも必要ではないかと考える。◆震災で卒業式が中止となった立教新座高校の校長先生のメッセージが、ネット上で大きな感動を呼んでいる。震災以降の日本のあり方や前へ向かって生きるための言葉がたくさんつまっている。

是非、お読みいただきたい。全文は長い。抜粋し引用する。◆大学という青春の時間は、時間を自分が管理できる煌めきの時なのだ。池袋行きの電車に乗ったときのように、諸君の脳裏に波の音が聞こえた時、君は途中下車して海に行けるのだ。高校時代、そんなことは許されていない。働いてもそんなことは出来ない。家庭を持ってもそんなことは出来ない。「今日ひとり海を見てきたよ。」そんなことを私は妻や子供の前で言えない。大学での友人ならば、黙って頷いてくれるに違いない。悲惨な現実を前にしても云おう。波の音は、さざ波のような調べでないかもしれない。荒れ狂う鉛色の波の音かもしれない。時に、孤独を直視せよ。海原の前に一人立て。自分の夢が何であるか。海に向かって問え。青春とは、孤独を直視することなのだ。直視の自由を得ることなのだ。大学に行くということの豊潤さを、自由の時に変えるのだ。自己が管理する時間を、ダイナミックに手の中におさめよ。流れに任せて、時間の空費にうつつを抜かすな。いかなる困難に出会おうとも、自己を直視すること以外に道はない。いかに悲しみの涙の淵に沈もうとも、それを直視することの他に我々にすべきはない。海を見つめて大海に出よ。嵐にたけり狂っている。でも海に出よ。真つ正直に生きよ。くそまじめな男になれ。一途な男になれ。貧しさを恐れるな。男たちよ。船出の時が来たのだ。思い別れのカウントダウンが始まった。忘れようとしても忘れえぬである。

宏と語る
小さな小さな
ティーパーティー
受付中!!

〈お気軽に声をおかけください〉
印南 宏 後援会
〒270-1198
我孫子市日の出 1131
(日本電気労働組合我孫子支部)

印南 宏 自宅
布佐平和台7-1-8
TEL 7189-1598
E-MAIL innami@mqd.biglobe.ne.jp



宏

う大震災の時のこの卒業の時を忘れるな。鎮魂の黒き喪章を胸に、今は真つ白の帆を上げる時なのだ。愛される存在から愛する存在に変われ。愛に受け身はない。教職員一同とともに、諸君等のために真理への船出に高らかに銅鑼を鳴らそう。／梅花春雨に涙す二〇一一年弥生十五日。立教新座中学・高等学校校長 渡辺憲司 ◆私自身、銚子の荒海を見ながら育った。今日まで地震への備えや原発の問題等私たちが大人は、今の若者に偉そうなことを言えるほど、しっかりと道を歩いてきたのであるうか、自問自答する。もう一度、青春時代に戻った気持ちで被災地のために行動していきたい。